

「小さいものでも建てかけ…一坪四方のもの建てるのやで、一坪四方建家ではない…つぎ足しは心次第」という教祖のお言葉を頂いて、つとめ場所を建築する相談がまとまり、元治元年(1864年)の7月26日より本教最初の普請が始まりました。飯降伊蔵様が入信されてから僅か2カ月余しか経っていない時です。

その建物は、現在は教祖殿の北庭に移築され、記念建物として保存されていますが、その広さは、3間半に6間(約6.3 m×10.8 m)のもので、現在の荘厳な教祖殿のすぐ側にありますので小さく見えますし、東西礼拝場や“おやさとやかた”が立ち並んでいる現在では、全く目立たない規模の建物です。今であれば、地方の教会でも、このつとめ場所より大きなものが沢山あります。

しかし、元治元年頃の和(奈良県)では、民家は2間か2間半に5間というのが普通であって、3間半に6間の建物というのは、お上(政府)から特別の許可を得ないと建てられない規模のものであったのです。つまり、飯降伊蔵様をはじめとする先人たちは、当時の普通サイズの家より一回り大きなものを建てよう、と決心されたわけです。

そして、その3間半に6間というのは21坪ですから、教祖が、“一坪四方が基本で、それへのつぎ足しは心次第”と仰せられたことからすれば、基本の20倍/20坪の広さを増築するという事です。当時と現在と単純には比較できませんが、仮に、一坪50万円とすれば、今の金額で1,050万円の建築を始められたのです。

そこで、どのように建築を進めるかの最初の相談がなされ、山中先生が材木代、飯降先生が大工の手間賃(本人と弟子の分)、辻先生が瓦、仲田先生が畳6枚、西田先生が畳8枚を献納することを申し出られました。しかるに、つとめ場所の間取りから申しますと、21坪(正確には21.5坪)の中、4坪が上段の板の間で、後は8畳の間が2つと、6畳の間が3つです。つまり、畳は34枚必要なのですから、寄進を申し出られた畳数だけでは20枚不足です。また、電気やガス、水道などはなかった時代ですから、そういう工事や器具の代金は不要だったものの、壁や建具は必ず必要ですから、左官や建具職人も手当しなければなりません。しかし、そういうことの相談がなされた記録は見つかっていないのです。

また、最初の相談から1カ月後の8月26日に、特に熱心な人たちが持ち寄った普請の寄付金は、合計で5両だったといわれています。当時の相場の平均は、米2石(約360リットル)で5両だとされますから、今に換算すると10~12万円くらいが集まったということでしょうか。そして、その5両を手付けとして材木や瓦を注文したのですが、それは、つまり、総予算の1%しか現金がなかったのに、当時としては例外的な大建築を着工したということなのです。

お道の普請は、最初にお金があるから始めるのではなく、人々の真実の心を寄せて一神様のご守護を頂いて進めていくのだといわれますが、本教の最初の普請の様相がまさにそのようなものだったのです。つとめ場所の普請は、教祖にたすけられた一人の熱心家の報恩の思い一信者の方からの申し出によって始まり、その規模は最初のものより20倍に膨れ上がった。その20倍は子供の方で相談して決めたものでしたが、現実には大工の手間以外はほとんど目処がたっていないという、とても不安な状況での建築着工だったのです。

しかるに、最初に相談された山中、飯降、辻、仲田、西田の諸氏以外に当時は信者がいなかったかという、そうではないと考えられます。このつとめ場所の普請をする最初の相談がなされたのは元治元年の7月のことですが、教祖はこの同じ年の春から、熱心に信仰する者、50~60人に、“扇のさづけ”を渡されているとの記録があります。つまり、飯降先生の先輩、同輩で、教祖がよふぼくとして使おうと期待された人が、少なくとも50~60人はおられたのです。しかるに、最初に集まった寄付金が今のお金で10~12万円。平均すれば一人2,000円~2,400円です。貨幣経済の時代ではなく、現金収入などなくても生活ができた時代だという状況を鑑みても、決して多いといえる金額ではありません。つまり、当時は、教祖が“扇のさづけ”を渡された信者さんでも、つとめ場所の普請をわが事として考えられる人がほとんどいなかった。いざ普請となると、実際に“何々を引き受けさせていただきます”と申し出た人は僅かに5人であり、最初に寄ったお金も微々たるものでしかなかったのです。

さて、この「ひながた」の史実と同じ状況は、今の時代に教会の普請をする時にもよく見られると思います。

たとえば、一人の布教師の長年の丹精によって、おさづけの理を拝戴するよふぼくが50~60人もできてきた。古い民家の座敷に神様をお祀りして、布教師の看板を掲げているが、ここでは狭くて十分におつとめもできないし、参拝者が座る場所もない。このままでは教会の設立も覚束ないので何とかしたいとは思っているものの、布教師自ら神殿建築を打ち出すだけの踏ん切りがなかなかつかない。思い悩んでいる時に、建築に関わっている人で熱心な信者さんが現れた。その人が、「おたすけを頂いたお礼に」と、参拝場の拡張を申し出てくれた。しかし、「古い建物を拡張するより、一層のこと新築をしたい」と思い切つて言うと、その人が中心になって神殿建築をしてくれることになり、他の熱心な信者にも声をかけてくれた。

ところが、そういう声かけをした途端に、おさづけの理の拝戴までしていて頼りになるはずだった信者の多くが布教所に顔を見せなくなり、「やりましょう。自分はこれだけのことをさせて頂きます」と申し出てくれた人が僅かに5~6人。普請金も、最初は必要な金額の100分の1くらいしか集まらなかった。それでも、普請を言い出してくれた人の日頃の信用があったので、何とか建築資材などの注文ができて建築を始めることになった。というような経過をたどることは、ひながたの道を考えれば、当然起こり得ることなのであります。

筆者も教会長時代に、境内地の拡張や信者会館、詰所などの普請をしましたが、「この教会の力ではそんな大きなことができるわけがない」と、本来は頼りになるべき重役たちがその都度反対しました。「会長さんのおっしゃる通りにしましょう」と言ってくれた2~3人の役員以外には、積極的に賛成してくれた人はほとんどいませんでした。普請金の準備もゼロ、というより、それ以前からの借用金の返済が残っていましたから、いわば、マイナスからの出発でしたが、その都度々々不思議なご守護の数々を頂いて、完工する喜びを味わうことができたのです。

つまり、いつの時代においても、「をや」の期待通りに道の御用を荷なう人は少数派で、肝心な時に逃げ出す人の方が多いのです。しかし、その中、自らの懐勘定をせずに、「をや」に喜んで頂くべくつとめる人が、信仰の結実の喜びを味わえるのです。